東京ジャーミイ金曜日のホタバ

２０１２年１月 20

ドゥアーとイバーダ

親愛なるムスリムの皆様

ドゥアーとイバーダは、信者がその無力さと弱さを、敬意をもってその主に訴え、敬意をもって助けを求めることです。主とそのしもべの間の最も力強い結びつき、最も尊い行為はドゥアーとイバーダです。これらは、アッラーへのしもべであることの訴えであり、証明です。ドゥアーやイバーダを伴わない心は安らぎがなく、消えることのない痛みの中にあるのです。真の安らぎへは、ただアッラーにドゥアーし、慈悲の扉をノックし、その偉大さ、勇壮さの前でサジュダを行い、イバーダをし、アッラーを唱念することで至ることができるのです。事実、崇高なるアッラーはクルアーンで、「これらの信仰した者たちは、アッラーを唱念し、心の安らぎを得る。アッラーを唱念することにより、心の安らぎが得られないはずがないのである。」（雷電章第２８節）と仰せられています。

一人の人間として周囲で起こっている出来事から影響を受けたり、仕事が思うようにいかないことに悲しんだりすることはあります。しかしこのような悲しみ、苦しみは一時的なものであることを知るべきです。そして生活すべてを覆うような嫌気やストレスに陥るべきではないのです。一人のムスリムにとってストレスに陥ったり嫌気を感じたりすることは正しいことではありません。なぜなら人生の重荷のもとで弱さや苦しみに陥った時には、自身にとって頸動脈よりもより近く最も隠された秘密ですらご存じであられ、すべてに対し力の及ぶ崇高なアッラーを信頼するからです。アッラーにドゥアーし、懇願し、その豊かな恵み、気前のよさに庇護を求めるのです。アッラー以外に苦しみを解消し、悩みを解決し、病へ癒しを与えられるお方が存在しないことを知ります。味わった苦しみは永遠の褒章の要因となる一つの試練として受け止められます。そしてそこに慰めが見出されるのです。クルアーンは、大きな苦しみを味わい、アッラーにドゥアーをしたユーヌスを私たちに例として示しています。ユーヌスのドゥアーが受け入れられた時「それでわれはかれに応え、かれをその苦難から救った。われはこのように、信仰する者を救助するのである。」（預言者章第８８節）という言葉でそれを私たちに告げられているのです。

つまり苦しみや悩みを与えられるアッラーは、その解決、癒しをも与えられるのです。されには、あらゆる困難について容易さを創造されたことをもクルアーンで示しておられます。「本当に困難と共に、安楽はあり、 本当に困難と共に、安楽はある。」（胸を広げる章第５－６節）預言者ムハンマドも、信者に降りかかる禍が罪の償いになることをハディースで教えられておられます。「降りかかる病、困窮、悲しみ、そしてそういった苦しみに対しアッラーは、信者の罪の一部を消される。」

イバーダやドゥアーから遠い人々は常に何かを探し求め、一種の空疎さの中にいます。そしてその心に安らぎの欠如を感じます。しかしアッラーはクルアーンで、「（不信者に）言ってやるがいい。『あなたがたがわたしの主に祈らないなら、かれはあなたがたを、構って下さらないであろう。』」（識別章第７７節）「われに祈れ。われはあなたがたに答えるであろう。だがわれに仕えるのに高慢な者たちは、必ず面目潰れの中に地獄に陥るであろう。」